

浄土

1988-4

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省 特別授承認雜誌）第三二五号
昭和六十二年三月二十五日印刷 昭和六十二年四月一日発行
第五十四卷 四月号



四月の秀句

長閑なるものに又なき命かな

久保田万太郎

美しき春日こぼるる手をかざし

中村汀女

永き日の機に生れたる花鳥かな

橋本多佳子



四月号



其のこえ、五根五力、七菩提分、
八聖道分、かくのごとき等の法を
演暢す。

——『阿弥陀経』

目 次

法 話

釈尊誕生に思う……………川 村 悠 穂……(2)

《連載随想〔1〕》

饅頭海水に浮く……………高 橋 良 和……(9)

=仏教童話=

花まつり

——『イタイタ』ファミコン——……………布 村 哲 哉……(14)

関通上人に学ぶ(上)……………正 村 英 明……(21)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <13>

海と山の狭間で……………木 下 隆 一 ……(28)
——唱歌と童謡(3)——

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第46回……………寺 内 大 吉……(35)
弥陀の化身 挿絵 松澤 達文

表紙絵 小林治郎画

(法)

(話)

釈尊誕生に思う

川^{かわ}村^{むら}悠^{ゆう}穂^{すい}

(静岡市西福寺住職)



(一)

四月八日は、お釈迦さまのお誕生日といわれております。

お釈迦さまは、お母さまのマーヤー夫人が出産の為、お里に帰る途中、ルンビニーの園に立ち寄られた時、アショークの花がきれいに咲いているので、それを手折ろうとした所、急に産気づき、出産されたということであります。

私が今から二十二年前、昭和四十一年二月成道の地ブダガヤに行く途中、カルカッタの博物館に寄った所、鉢植えの、アショークの花を教えられました。それは菊の花の一片のような花で、ピンク色をした可愛らしい花でした。

一国の王子として生まれ、その国を継ぐシッダルタ太子となられ、何の不自由もないと思われるお方が、何故、後には、お城を出られ、難行苦行をなさるお方になられたかという第一の原因は、何であつたろうかといえますと、それは、太子がお生まれになつてから間もなく、お母さんのマヤー夫人が亡くなり、その妹マハーブラジャーパティという方に育てられたのが第一の原因と私は思うのであります。

生まれてきた時のことを覚えてゐる人はないと思ひます。私達は、これがお母さんだよ、これがお父さんだよといふことは、知らず知らずの内に思ひこまされてゐるだけであります。そして、疑えば疑えるのであります。そう信じてゐるだけであります。人の子はある人が母親であり父親であると思ひるのであります。これも疑えば疑えるのであります。両親だけは、これが我が子と先ず信じられると思ひます。然し私達は、父親・母親として育てて下さつた両親を本当の両親と信じてゆきたいものであります。信ずるといふことがなければ一刻として生きてはゐられないと思ひます。

今、この部屋の空気には放射能が流れ込んでゐないと思ひから、安心して部屋の中にもゐられますし、出されるお茶一杯にしる、お料理にしる、この中に毒が入つてゐないと信じてゐるから、お茶ものめ食事も頂けるのであります。

(二)

お釈迦さまが、人生に悩みを抱かれ、ついに城を出られ山の中に入り、難行苦行の生活

に入られたということは、物心がついた頃、お釈迦さまは、御自分からお母さまに疑いをもち始めたか、このお方は本当のお母さんでなく、本当のお母さんは亡くなられたということを知られたからであろうと思います。そしてある時、農夫の田を耕すその鋤の先に踊りでた小虫を、小鳥が飛んで来て啄んでいったのをみて、弱肉強食の世界を知り、あるいはまた、東の門から出た時、老人を見、南の門から出た時、病人を見、西の門から出た時、お葬式を見、北の門から出た時、修行者を見て、世の無常を思い、何故人間は生まれ歳を取り病気になる死んで行くのだろうかと思ひ悩むようになり、その悩みが高じ、父のシュッドーダナ（浄飯大王）やマハーブラジャーパティが心配されましたが、またお妃のヤシヨーダラや、一子ラーフラがあるにも関わらず、遂にお城を出られてしまわれたのであります。

お釈迦さまは山中での修行では悩みから解放されず、遂に山を下りナイランジャーナ河で身体垢をぬぐい、スジャータの乳糜を受け力を得て、更めてピッパラ樹の下に坐して、冥想に入られたのであります。

ここに悟りを得られ、心は開け、明るい気持となられ、即ち仏と成られたのであります。仏教は、この境地即ち成仏することであり、よく死んだら迷わず成仏するようにといいますが、成仏とは、ホトケに成ることであり、ホトケとは悩みがホトケることであり、行止りがホトケることと私は受けとるのであります。仏（ブッダ）というといンドの言葉でブッダ即ち悟った人、目覚めた人ということであり、悟れば悩みもホトケることであ

りましょう。然し生きているうちに、仏になることが出来ればそれにこしたことはありません。然しそれがなかなか出来ない、何故であろうかといえは私達には、三毒の煩惱というものがあるからであり、その煩惱をなくすることが出来ないのです。そこで、

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋癡

從身語意之所生 一切我今皆懺悔

と唱えるのでありますが、なかなか私達は悟りがえられず悩みから解放されないのです。あります。

(三)

お釈迦さまは四月八日のお誕生といわれますが、その前日の七日は、私達の宗祖でありお念仏の元祖である法然上人のお誕生日であります。

その法然上人は、中国の善導和尚が、お釈迦さまの説かれた「仏説観無量壽經」の下品下生という所に「十念を具足して、南無阿彌陀仏と称す。仏名を称するがゆえに、念々の中に於いて、八十億劫の生死の罪を除く」とありますのから、「観經」の疏をお書きになりましたのに「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」という文を御覧になられてから、私達のような無智のものは、ただ南無阿彌陀仏とお念仏を唱えて行くだけであります。それが私達が救われる道であり、仏になるもとであるということで、法然上人

は浄土宗を開かれたのであります。

(四)

今は、コンピュータの時代となりました。孫達がファミコンをやるので、私もやりませんが、孫達にかないません。囲碁や将棋のカセットがあるというので、それを買ってきて貰いました。こちらがうつと、それに対応してうつてくるのであります。アットいう間に、どこからか飛車がとんできたり、角がとんできたりして、こちらの駒がとられてしまうのです。

M・ミンスキーという、コンピュータ学者が「心の研究にはブッダの言葉をしるした仏典が非常に参考になる。キリストは人間の心については何も語っていない。要するに道徳家なのだ。もし神が人間を創ったのであれば、その神はいったい誰が創ったのか。ブッダはそれに対して優れた心理学者だ」といっています。

お釈迦さまが、クシナガラでお亡くなりになる時、お弟子の質問に答えて、先ず自らを信じ頼りとしなさい、そして、いつでも、どこでも変らない法を頼りにしなさいと、三法印或いは四法印といわれるものをお教え下さったのであります。その第一の旗印は、諸行無常であります。

この度、利根川進教授が「細胞中の遺伝子は一定不変」としてきた従来の遺伝学、分子生物学の定説を根底から覆し「遺伝子がバラバラの断片から完全な物に再編成される」

という、全く新しい事実を発見し、ノーベル賞を受けられました。これは、諸行無常を証明されたと思うのであります。

湯川秀樹博士は、「俱舍論」の極微から中間子理論を発表されました。

三年前即ち、昭和六十年には物理学会で大事件がおきて、宇宙のことがすっかり分からなくなったということです。いま世界の一流物理学者が、ダライ・ラマ（ラマ教主）に会って、なにかヒントをえようと懸命になっていると、ロケット博士の糸川英夫氏が報じていました。

それは、真空状態で羽毛とコインを同じ高さから落とした場合、羽毛の方がコインより早く落下するというもの。これは重力だけが働いたからではなく、物体に対して加速度にわずかな違いをもたらず、何物かが働いたからだと考えられるということです。「今、学生に信仰心は薄いが天文学者には信仰心があります。それは宇宙のことが分かれば分かる程、分からないことが多くなり、科学で割り切れぬ宇宙の神秘を知れば知るほど信仰心深く」とこれまた、新聞は報じていました。

(五)

今年は龍の年、五月には沢山鯉のぼりがあがることでしょう。

「碧巖録」を書いた雪竇は、

江国の春風吹けども起たず

鷓鴣啼いて深花裏にあり

三級浪高うして魚、龍となる

痴人猶おく夜塘の水

と、詩ったそうです。

揚子江の南岸に春風が吹いているが、風が弱いので波がたたない。波は立たないが、確かに春風は吹いている。私達も昨日より今日、今日より明日へと、歳をとっているがそれに気がつかない。ウグイスが花盛りの花の中で鳴いているが姿が見えないが、確かにあれは、ウグイスである。そのように私達にもそれぞれ人格というものがあるがその人格を見ることは出来ない。

昔、禹という王さまが、黄河の上流に三段のダムを造ったところ、滝が出来た。その滝を下から鯉がのぼったが、滝が急なので尾鰭・背びれがすりきれて、手となり足となり、頭には角が生えて龍となって天に昇って行ってしまった。痴かな人はまだ鯉が川下にいると思い夜まで探している。

世のなかには、私を含めてますます老人が増えています。昔のことを思っても、どうにもなりません。どうすることも出来ないことを、明るく正しく仲よく過ごしてゆくには、お念仏を心の支えとして行くより他しかなかったがありません。

念仏は弥陀にも利生の本願　釈迦にも出世の本懐なり

饅頭海水に浮く



高たか
橋はし
良りょう
和わ

節分ごろとても寒くなったので、すでに予定をたてていたことが、重なってハワイに出かけた。年に二、三回ハワイに赴いていたので、今回で三十一回目の旅である。

今回の眼玉は、真珠湾のアリゾナ艦上での

慰霊法要と、煎茶道の献茶の儀式のための案内役である。アメリカの海軍、といっても真珠湾の米海軍の出先き機関の承諾が必要とあって、ハワイの中村良観総監に交渉を依頼した。

早速許可があつたが、どうやら前の所長が、交替したらしく、

「アリゾナ博物館上でのショウは、好ましくないから、わからないようにやること」という条件づきであつた。

法要をショーと呼ばれ、献茶も同様に見なされる点では、アメリカ式である。

といつても抗議したところで、もしさらに硬化されると、元も子もなくなってしまうので、まず法要要具、すなわち鉦とか、かいしやくを用いない、緋衣や金闌の袈裟も使用しないようにしよう、そして煎茶道では、艦上のあの戦士者の名簿の前で、お点前をしない、などといったことを申し合わせた。

仏教側の代表の法主と一行は、略衣と略袈裟で、そして煎茶道のほうは、やはり洋服ではということではホテルで和服に着替え、そして真珠湾の休憩室で煎茶のお点前と、お供え

の日本から持参の上用饅頭を菓敷にのせてあの連絡の船で、アリゾナの艦上におりた。

運こんでくれる連絡船が、割合に楽であつたのは、せめての便宜をはかってくれたためであらう。

献花は中村総監に用意してもらつたので、これは許されていた。

艦上は我々の一行と、監視の米海軍の人だけであつたのは幸いであつた。

一行は静かに、まるで無言のようにおつとめした。声の大小は問題でない。心である。

こちらから、わざわざハワイまで赴いたその心が、どこかに通ずればよい。

そしておつとめの途中で献花して、そのあと献茶をした。

わたしたちにはこんな風景は、いつもののであるが、もし白人がその席におれば、おそろく珍らしかつたにちがいない。

こうして行事は無事終った。参列の人々にとっては、必ずや印象に残ったことと思う。

さてそのあとの付録がある。

式が終って煎茶道の方から、希望があった。

「今献茶したお茶と、お供えのお菓子を海に流して慰霊したいと思いますか」

というのである。

「ショーとして禁止されているのであるから、無理かもしれませんが、でもここに海軍の水兵がいるので交渉してみましよう」というので、たどたどしい英語で交渉を試みた。すると、

「まあいいでしょう」

と承諾してもらった。

そこで宗匠は、このお供えを運こんで、艦上から海に投げた。

海の上には四十年すぎた今日まで、海の底から油がとろりと浮かんでいるのが目につく。

いつきてもそうである。たずねるとまだ十年ぐらいは、この油が浮くといっていた。

アリゾナ艦の機関部からの油だろうか、それとも今なお沈んでいる水兵の死体からの油だろうか。

人はいう、

「これは亡きアメリカ水兵の涙であろう」と、そういった感じもする。

どうしてあのかき爆撃をうけて戦死した水兵の遺体が、そのままに残されているのだろうかという疑問が残るが、どうやらこの真珠湾の海底は、泥でそうした作業が無理で何人かの犠牲者も出たから、そのままにしてあるともいわれている。

さて話はお供えのお茶と、饅頭である。

海軍の許可をうけたので、ささげた献茶のお茶は、海の水にまじって緑の色を消した。ところが饅頭である。五つの上用饅頭が、投

げ入れられた。

ごぼごぼと沈むと思つていたところ、それがなんと海上に、ぽっかりと浮いているのである。

長い間こうした饅頭は、海上に浮くのである。

まるでくらげのように、海上に漂うている上用饅頭である。

知らなかったのが恥しいが、上用以外の他の饅頭はどうであるのか、別に実験はしたことがないのでわからない。しかしこの場合の上用饅頭は、浮いている。もちろんしばらくすると、おそらく海水に溶けてしまふだろうか、この目でみた経験である。

このことは帰宅してから、来宅の知人にもたずねると、みんなそれは沈むでしょう、というのがほとんどであった。

いわゆる見ることが一ぱんたしかである。

ハワイにやってきて経験した収獲である。おもしろいことであつた。

日本は寒いから、ハワイにやってきたのに、ハワイもまた寒かつた。出発する前日ハワイに電話したら、

「今年は気候不順で、少し寒いですよ」

といわれたので、同行の人に連絡した。すると、冬のオーバーを着ていきましようか、といった。

「いや、寒いといってもハワイは常夏の国ですから、寒いというより少し涼しい夏ぐらいです」

と返事した。

日本の冬に旅立つのであるから、つい冬と同じように思われる。やっぱり夏である。

しかしハワイ島に赴くと、マガナロアの頂上はすっかり雪景色である。ハワイの四季は、頂上が冬、その八合目は秋、そして五合

目は春、そして麓は夏といった山が四季を彩っているのである。そうであるから、頂上ではスキーをし、麓では海水浴をしている。スキーヤーが水着をもって出かけるのはいつものことである。

マウイ島のハレヤカワの上にのぼると、この山はとても寒かった。オーバの必要を感じた。

やっぱり不順であつたのであろう。

今度の慰霊では、珍しい饅頭海水に浮くの経験は、うれしかった。

もう実験することはないかもしれない。

この慰霊の旅は、いつまでも忘れられないものがあつたと思う。

わたしがハワイを訪れると、不思議なことにハワイ島のキラウエヤ火山が、噴火する前であつたり、噴火したあとだったりする。これも珍らしいことである。

(新)
(刊)

『仏事と信仰生活・浄土宗』

宮 林 雄 彦 編

四六判 一四四ページ

定価 八〇〇円 (〒二〇〇円)

◎浄土宗の檀信徒には必携の書!!

平明な記述と豊富なイラストによるあかるい装丁の本!!

△発行▽

図 書 出 版 群 書

〒170 東京都豊島区巣鴨四一七一六―四〇三

TEL (〇三) 九一七―八四一一

(振替) 東京七一六八七五九

(話)

花まつり

(童)

—『イタイタ』ファミコン—

(教)

(仏)

ぬの
むら
てつ
や
布村哲哉

「アッ イタタ……。」

進一は 自転車にしがみついて顔をし
かめました。急いだのがいけなかったの
でしょう。

足をかけたペダルがクルクルと廻って
しまいました。足がペダルからはずれて

地面におちたのです。

自転車を 倒さないようにとふんばっ
て ひねった足首に体重がのっかったの
がなおさらいけなかったのでしょうか。
しばらくは自転車によりかかって足を
ふっていました。すぐになおると思っ

のです。

ところが足を動かすとビリビリします。地面に足をつけると

「イタタタ……。」

とても歩けません。しかたがないので片足でびょんびょんとびながら家へ入りました。

お母さんが心配して 張りぐすりを持ってきてくれました。靴下をぬいでみると もうくるぶしのところがはれています。くすりをつけながらお母さんは「明日お医者さんに行ってレントゲンをとってもらいましょう。それまではなるべく動かないで休んでいるのよ。」といいながら台所の方へ行ってしまうした。

こんなことは進一にとって始めてです。

少しでも動くと 「イタタタノ」

さっきまでは 自分がしたいと思ったことは すぐ立ち上ってできたし 行きたいところへはすぐに行けたのです。

ところがお母さんの敷いてくれた布団から立ち上れないのです。足を横にしただけでも「イタタタノ」なのですから。

そばに置いてある好きなファミコンをする気にもなりません。

一人ぼっちで足をながめていると ズキンズキンと音がします。足の中をなにかが走り廻っているみたいなのです。

はれてきた足首を そっとなでてみました。

「イタイノ」

小さな声がしました。それまでは進一が自分の口から云っていたとおもっていた。

たのです。

でも今の声は そうではないような気がしました。なんだか足の中からのようです。

「イタイタ」と。そんなことがあるのでしょうか。進一はもう一度 そっとくるぶしをなでてみました。

「イタイタ。」

たしかに声が出ます。それもやさしくなでると

「イタイタ。」

と小さい声が出ますし 強くなでると

「イタイイイタイイ。」

と大きく聞こえます。はじめは自分の声だろうとおもっていた進一は びっくりするやら驚くやら。たしかに誰かがいるのです。

「そこにいるのは だれだい。」

進一がたずねてみると これはふしぎ。足の中から返事がするではありませんか。

「ぼくは『イタイタ』。」

「えええ。ほんとに そんなものいるの。」

「ほんとうですよ。だって進一さんは

ぼくがイタイヨと泣いたので痛いところかわかったのでしょうか。」

「へえー すると君の『イタイタ』は痛いところにだけ住んでいるのかい。」

「いえいえ そうじゃありませんよ。」

「じゃあ どこにいるの。」

「どこにでもありますよ。おしえてあげましょう。進一さんが自分で自分の手をつねってごらんさい。」

「イタイノ」

「そろそこに『イタイタ』がいるのです。」

「それならば からだの中のどこにでも『イタイタ』はいるということじゃないか。」

「その通りなんです。しかもその『イタイタ』は進一さんのからだの中だけではないのです。ほらそのファミコンのスイッチボタンを押してごらん下さい。」

進一が手をのばして ファミコンのスイッチを入れると テレビの画面にはいつも遊んでいるのとは違う絵と音が出ました。

「これはおもしろそうだな。」

進一がコントローラーを動かすと 目の前の画面には 進コンと名前をかえた進一の人形があらわれました。そして進

コンは町の中を歩き出します。しかしあつちからも こっちからも人がとび出してきてぶつかるのです。そのたびに『イタイタイタ』と声がして進コンの姿は小さくなって行き ついに消えてしまうとゲームオーバーとなり終ります。

そうならないために 上手にコントローラーを動かして相手に道をゆずり『イタイタ』の声を少しでもへらして行くのです。でもそれはとてもむずかしいことです。進コンが町を出ると畠のまん中です。このようなところなら人とぶつかることもなく歩けるとおもったのですがまた『イタイタ』の声です。

どこから聞こえてくるのかと まわりを見まわしても なかなかわかりません。『イタイタ』の声がまだ続いています。

早く見つけないと進コンの姿は消滅してしまいます。

いましたいました。『イタイタ』と云っていたのは地面の下のアリです。土の中だったのですが、進コンがその上を歩いたためにおもたくて痛かったのです。

これでは、どこを歩いてても『イタイタ』と云われそうです。

動きまわってお腹のすいた進コンが、畠のトマトをひとつ取って食べようとしたらまたまた『イタイタ』です。でも食べなかったらどうなるでしょう。ふらふらで死にそうです。

ふらついたとき、こんどは畠の草をふんずけてしまいました。

『イタイタイタ。』

草の中にも『イタイタ』がいたのです。

草はあたり一面に生えているのですから、動いたたびにふんずけます。ふんずけるたびに『イタイタ』の点数がどんどんふえて進コンの姿が小さくなって行きます。もう歩いていられないので空へ飛び上りました。

やれやれ広い空なら助かるぞとおもったら大間違い。鳥の大群にぶつかって『イタイタイタ。』

こうなったら水の中へ逃げるしかありません。近くの池へとど込みました。

「ああこれでよかった」と最後まで安心させないのがファミコン。

怪じゅうのような魚が大きな口を開けて、進コンをひとのみにしようと向ってきます。

こんどこそ『イタイタ』ではすみません。ぱっくりと食べられて　すべてが終りです。

どこへ逃げたらいいのでしょうか。

ああそこまで大きな口が来ています。

どこか『イタイタ』の声の聞こえない国はないのでしょうか。

進コンは耳をふさぎ目をつぶって　おもわずさげびました。

「おかあさん！」

ファミコンの画面に買物から帰ってくるお母さんの姿が写りました。そうでした。

それはずっと前のことです。

お母さんが　弟のことばかりを云うので　しゃくにさわたった進一は　玄関の戸びらの上にサンダルをはさんておいたの

です。

買物から帰ってきて戸をあけたお母さんの頭にサンダルはゴツン。

進一の方を見たお母さんは　悲しそうな顔をしました。でも何もいみせん。「イタイ！」と　ひとことも云わなかったのです。

痛くても「イタイ」と云わずにだまっで許してくれる人がいたのです。

うれしくなった進一が　もう一度「おかあー」と呼ぼうとしたとき――

「どうだね　怪我のぐあいは。」

といいながら部屋へ入ってきたのは　会社から帰ったばかりのお父さんでした。

お母さんといいかけた言葉を「お父さん　お帰りなさい」といいなおしながらテレビを見ると　ファミコンはいつのま

にか消えています。もちろん さっきまでの『イタイタ』の声もきこえません。

「痛くはないのかい。」

お父さんが足を見ながらいいます。

「うん 少し痛いけど みんなも痛いんだから。」

進一がいうと お父さんはげげんな顔をしながら

「なんだって。みんなも痛い？ それは一体どういふことなんだい。」

と尋ねました。

「うん すこしわかったんだ。ぼくはいつもみんなの『イタイタ』といっしょに生きているんだってこと。」

痛いのは ぼくだけじゃないってこと。そして痛くても なんにも云わないでやさしくしてくれる人がいるってこと。

それがわかってよかったんだ。

それよりも ぼくトイレへ行きたいんだけれど からだを持ち上げてくれないかな。」

「よしきた。それ お父さんの肩にしっかりつかまるんだぞ。」

お父さんにささえられて やつと立ちあがることのできた進一は いつかお寺の花まつりで甘茶をかけたお釈迦さまの姿を思い出しました。

「そうなのだ。」

立ちあがることは こんなにうれしいことなんだ。

生きていることは こんなにたくさんのお『イタイタ』のおかげなのだ。お釈迦さまおめでとう。みんなもおめでとう。」

(おわり)

関通上人に学ぶ

(上)

まさむら
正村 瑛明

(東京・北区正受院住職)

江戸中期に活躍された関通上人(一六九六—
一七七〇)の行業記を通して、上人に学びたい
と存じます。

と申しましても、上人の一代記をお話しよ
うというのではなく、上人の中に、私たち現
代人が失なったもの、忘れかけている何もの

かがあるので、それを取り戻そうというので
す。

尾張国(愛知県)海西郡大成邑の人。父は
北条氏九代の末嫡横井氏。父母共に志三
宝に帰せし清素の農人なり。

お誕生は四月八日、釈尊ご出生の日と同じ

で、ああ、この辺から違うなあという感じですが、まず、関通上人について思うことは、まっすぐに正直な人。お誕生からご臨終までまっすぐに、どこもゆるんだところがない。

(関通)師性質剛正にして庸凡に類せず。

仏をたつとび善をうやまい、仁慈ありて殺業をにくむこと、老成人のごとし。

その性質は剛正。強くまっすぐに正直。並の子と違って老成された人のようであった。私たちは、妙に老成されて何でも分かつているようだが、まっすぐでもないし、余り正直でもない。適当に逃げ道をつくりながら、誤魔化して上手に生きてゆく。だから、本当のところは生きていないことになる。

皆がよいと言うからよいだろうと思ひ、皆がわるいと言うからわるいだろうと思ふ。

皆がよいと言ってもわるいものはわるいのだし、皆がわるいと言ってもよいものはよい。

私たちは、そうした真実、踏むべき道を忘れていたのではないか。

就職相談センターに自分の進路に悩む学生たちがやって来る。

就職先がなくて相談に来るのではない。どこへ行ったらよいかわからないで相談に来るという。そんなことは、今まで学んでこなかった。学んできたのは、入学するための勉強で、人生どのように生きるべきかなどということとは全然学んでこなかったのではないか。さて、関通上人はどうであらうか。

六、七歳で自称して出家せん。父これをゆるすと、歡喜踊躍して、手の舞い足の踏むところを忘る。帰仏の念、内にもよ。おし、仏堂僧寺に詣することをこのむ。これが六、七歳です。

老人になつても、「私は無信心です」などと言っている人は恥しいと思わねばならぬ。

ともかく、六、七歳で自分から出家したいと父親に申し出る。ゆるされると、まあ、大変な喜び方です。

そこで、父の従弟の僧吳峰の許に、そして九歳で、真言僧某法印に入室するが、一年余りで、浄土門へ転宗したという。

まあ、この辺が激しいですね。

正直でまっすぐな人は、どうしても激しく感ぜられる。一聞十知、一見不忘という位才気煥発な上人。絶対、誤魔化さんのです。

十三歳、中一色村西方寺照譽靈徹上人について剃髮得度を受け、元教と名を改める。その西方寺内の古像の前に上人は日参します。

師、毎夜ひそかに、その像を拝し、道学成就して、遂に化四海にみち、ひろく衆生を済度することを得せしめ給え、と。

この激しさは素晴らしいですね。

なにしろ、十三歳ですからね、十三歳で、

「道学成就して、遂に化四海にみち、ひろく衆生を済度することを得せしめ給え」というのですから、恐しいかぎりです。

こういうスケールの大きい誓願というものを私たちは忘れてしまっている。

上人が初めて教化を施されたエピソードがあります、これがすさまじいのです。

二十九歳、命を受けて、伊勢長島の高岳寺に住持していた頃です。

平山空山という者が、上人に帰依して、浄業念仏を修していた。

そんな頃、儒士の小松崎八右衛門、二階堂文右衛門らが空山の家にしばしば来ては、仏道を誹謗し念仏をやめさせようと迫った。もちろん、空山は一笑に付して追い返した。

星霜つもりて七十歳になった空山は重い病いに倒れた。

すると、例の儒士らが来て、もう念仏をや

めよ、何の利益もない念仏はやめて、早く儒教に帰せ、とすすめる。空山は、苦しみの余り、その語に随って、念仏をやめた。

だが、病苦いよいよ増して苦しむ。見るに見かねた家人の者が、上人のところへ来て、空山にお十念を授けて欲しいと願ひ出た。

すぐさま、上人は空山の許にかけつける。

空山は、形相恐しく上人をにらみつけ、念仏に何の利益があるのか、とののしりつつ、事もあるか上人をつき倒した。すると、

師ただちに空山をおしふせ、上にうち乗りていわく。汝空山、病はこれ宿業の所感にして、仏もいかなともし給うことあたわず。又日頃真実に念仏したる者の難病にかかり、臨終にたえがたき苦痛をうくる事は、身後に地獄に墮して氷劫大苦をうくべきを、生前暫時の病苦に転じて、罪業の報を軽く受け果たす事もあるなり。

その念仏したる者の、必らず極楽にうまるといふことは、如来の金言にして現証世上に多し。汝実の志あらば、この世の病苦さえ、かく苦しく耐えがたし。況や地獄の重苦をやと思ひ、いよいよ如来の大悲をかこちて、念仏すべき道理なるに、平常日頃念仏を修し、今命終の期に臨んで、邪見をおこして念仏をとどめ、みづから、火坑にいらんとす。豈に愚昧の至にあらずや、と。或は呵し或は勧め給ひければ、空山云く、われ今重病身にまゐつて苦痛かぎりなし。ただはやく死ななことを願う。かつて生きんことを欲せず。もし実に淨利の生ずべきあらば、われまさに念仏して往生せん。謂う、師われを殺し給われ、という。

少々長文の引用ですが、まことに切迫した問答です。結局、上人の勸説を受けて、空山

は、「もう苦しくて仕方ないから、早く楽になりたい。もし、浄土に往生できるならば、私は念仏して往生したい。さあ、師よ、私を早く殺してくれ！」と言うのです。

まあ、鬼気迫まる場面ですね。すると、上人は、

師答えて、汝急に念仏せよ、われ汝を殺すべしと言いて、空山の両手を取り南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と申しかけ給う。

空山相和して六、七十遍称えけるに、たちまち颯風の塵雲をはらうが如く、病苦除尽し身心安適になりぬ。それよりふかく前非を悔い、ひとえに往生を願い、勇み進んで念仏す。師かたわらに坐して助音し給いけるが、しばらくありて、称名の声と共に息絶えたり。

普通は、こんなことはできません。私たちは適当なところであきらめてしまう。

ところが、関通上人というお方は、おれがやらなきゃ誰がやる、と思っていたんですね。おれが救わなければ、一体誰が救うのだ。

今日の私たちは、そんな気概は失なっちゃって、おれがやらなくなっちゃって、誰かがやってくれるだろう、と考える。

現代人は物が豊かですから、こんな気概は必要ないかも知れません。

しかし、三食たべてのんびり一生終るのが幸せか、三食を二食一食になっても、おれがやらなきゃ誰がやるんだ、と厳しく生きる世界にすすむのが幸せなのか、今一度、考えてもよいことだと思ふ。

関通上人のこうした気概というものは、どこから出てくるのかというと、「志三宝に帰せし清素の農人」であった父母の思いにその源がある。

人間を見る場合、その心の深いところ、奥にあるものがその人の一生を決めてゆく。

私の恩師のB師は、念仏に徹せられた方です。何故、あのように念仏をなさるのか長い間わかりませんでした。ところが、B師のお話をうかがっているうちに思い当りさした。

師は生後一年四ヶ月で三十九歳の実母と死別されました。

師の郷里は、〃善光寺のとうとう念仏、とうからとうまで称うれば必らず仏になるそうなりと子供たちの遊び唄にうたわれる程、お念仏のしみた土地柄です。師の母は師が生れる前頃から特に信仰深くなったという。

菩提寺はもちろん、近くのお寺の法座には欠かさずお参りをして念仏聞法に励んだ。

師の幼名修は、実母のたつての希望で、身を修めるように、との願いをこめてつけてくれた名前だと申します。

病を受け容態悪化した師の母は死を覚悟します。そこで、師の祖母が、「覚悟はできているか。」とたずねます。すると師の母は、「自分は、すでに覚悟ができているが、横に寝ているこの子(師)が可哀そうだ。」と言って泣いたと申します。

そうして、間もなく亡くなれました。

こうした母への思慕の念というものが、やがて仏様への思慕の念と重なって、師をしてお念仏にかりたてたのではないか、と思う。死の向うに逝ってしまった母に会うには、その死をこえるしか道はない。

それが、師にはお念仏の道であった。

まだ聞いていないが、またお聞きしようとも思わぬが、B師自身、自分が救われねば、「この子が可哀そうだ」と言って泣かれた母も救われないのだ、と思ったのかも知れぬ。

(つづく)

好評の新刷

『浄土』誌連載の珠玉の回想記

父と母、そしてふるさとへのはるかな想いをやさしく綴る

『み仏とともに』

——父母に捧ぐ浮生の記——

大正大学学長

安居香山 著

B6判 二〇〇頁

定価 一八〇〇円 ㊦ 二〇〇円

△発行△ 山喜房仏書林

㊦ 130

東京都文京区本郷五―二八―四
(振替) 東京 〇―一九〇〇

木

下

隆

一

随

筆

集

13

海と山の狭間で

—唱歌と童謡(3)—

木の
下
隆
一

調べて行くうちに、「言文一致唱歌」の中には、私が童謡だとばかり思っていた物が数多く含まれていて、それらの大部分が明治時代に作られていたのが分かり、驚くと同時に不明を恥じた次第であった。私と同じ思いの方も少なくないと思うので、煩瑣ではあるが参考のために題名を挙げておく。△註、文は文部省が著作権を所有して、作詞・作曲者名が明らかにされていない楽曲。氏名の記載されている物は、上が作詞者、下が作曲者。『』で記した楽曲は必ずしも言文一致ではないが、現在も歌われている唱歌を表す。▽

「うさぎ」(うさぎ うさぎ なに見てはねる……文)。「一月一日」(年の始の例として……) 千家
尊福・上真行。『港』(空も港も夜ははれて……) 旗野十一郎・吉田信太。『夏は来ぬ』(卯の
花の匂ふ垣根に……) 佐々木信綱・小山作之助。『鉄道唱歌』(汽笛一声新橋を……) 大和田建
樹・多梅稚。『キンタラウ』(マサカリカツイデ、キンタラウ……) 石原和三郎・田村虎蔵。『モ
モタラウ』(モモカラウマレタ、モモタラウ……) 田辺友三郎・納所弁次郎。『花』(春のうらら
の隅田川……) 武島羽衣・滝廉太郎。『箱根八里』(箱根の山は天下の險……) 鳥居忱・滝廉太郎。
『荒城の月』(春高樓の花の宴……) 土井晩翠・滝廉太郎。『はなさかぢぢい』(うらのはたけ
で、ぼちがなく……) 石原和三郎・田村虎蔵。「鳩ぼっぼ」(鳩ぼっぼ 鳩ぼっぼ……) 東くめ・
瀧廉太郎。「お正月」(もういくつねると お正月……) 東くめ・滝廉太郎。「うさぎとかめ」
(もしもし、かめよ、かめさんよ……) 石原和三郎・納所弁次郎。「大こくさま」(おほきな
ふくろを かたに かけ……) 石原和三郎・田村虎蔵。『戦友』(ここは御国を何百里……) 真下
飛泉・三善和氣。『一寺法師』(ユビニ、タリナイ、イッスンボウシ……) 巖谷小波・田村虎蔵。
『美しき天然』(空にさへづる鳥の声……) 武島羽衣・田中穂積。『青葉の笛』(一の谷の 軍破
れ……) 大和田建樹・田村虎蔵。「ツキ」(デタデタツキガ……) 文。「こうま」(はいしいは
いしい あゆめよ小馬……) 文。「ふじの山」(あたまを雲の上に出し……) 文。「春が来た」(春
が来た 春が来た……) 文。「虫のこゑ」(あれ松虫が鳴いてゐる……) 文。『われは海の子』(我
は海の子白波の……) 文。『鎌倉』(七里ヶ浜のいそ伝ひ……) 文。『日の丸の旗』(白地に赤く
……) 文。「鳩」(ぼっ ぼっ ぼ、鳩ぼっぼ……) 文。「人形」(わたしの人形は よい人形……)

文。「かたつむり」(でんでん虫、かたつむり……)文。「牛若丸」(京の五条の橋の上……)文。「桃太郎」(桃太郎さん桃太郎さん……)文。「池の鯉」(出て来い出て来い池の鯉……)文。「二宮金次郎」(柴刈り縄なひ草鞋をつくり……)文。「浦島太郎」(昔々浦島は……)文。「案山子」(山田の中の……)文。「紅葉」(秋の夕日に照る山紅葉……)文。「雪」(雪やこんこ……)文。「茶摘」(夏も近づく八十八夜……)文。「汽車」(今は山中、今は浜……)文。「冬の夜」(燈火ちかく衣縫ふ母は……)文。

大正期に入ると、その数は少なくなる。

『春の小川』(春の小川はさら／＼流る……)文。『村の鍛冶屋』(暫時もやまずに 槌うつ響……)文。『鯉のぼり』(薨の波と雲の波……)文。『早春賦』(春は名のみの風の寒さや……)吉丸一昌・中田章。『海』(松原遠く消ゆるところ……)文。『冬景色』(さ霧消ゆる湊江の……)高野辰之・岡野貞一。『朧月夜』(菜の花畠に入日薄れ……)高野辰之・岡野貞一。『故郷』(兎追ひしかの山……)高岡辰之・岡野貞一。『浜辺の歌』(あした浜辺をさまよへば……)林古溪・成田為三。『とんび』(とべとべとんび、空高く……)葛原しげる・梁田貞。

昭和に入つて、「言文一致唱歌」は定着した観がある。エホンシャウカ(ハルノマキ)の「コヒノボリ」(ヤネヨリタカイコヒノボリ……)などは、その最たる物であろう。その

他童謡風の唱歌を拾ってみると、「電車ごっこ」（運転手は君だ、車掌は僕だ……）井上越・下総統一。「チューリップ」（サイタ サイタ チューリップ ノ ハナ ガ……）未詳・井上武士。「螢」（螢のやどは川ばた楊……）井上越・下総統一。「牧場の朝」（ただ一面に立ちこめた……）杉村楚人冠・船橋栄吉。「ウミ」（ウミハ ヒロイナ、大キイナ……）林柳波・井上武士。「オウマ」（オウマノ オヤコハ、ナカヨシ コヨシ……）林柳波・松島舞。「花火」（どんと なった。花火 だ、きれい だな……）井上越・下総統一。「スキー」（山はしろがね 朝日を浴びて……）時雨音羽・平井康三郎、等々がある。

「文部省唱歌」とは「文部省編集の唱歌集」或いは「文部省唱歌集に収録されている唱歌」といった意味で使われている言葉であるが、明治四十年代初頭まで、唱歌の教科書は国定ではなく、民間で出版した検定教科書が用いられていた。田村虎蔵等が唱道した「言文一致唱歌」は、平易で子供にも魅力的だった事と、東京高等師範学校と学習院の後ろ盾があったため、小学校教員の支持を得て全国的に普及したが、東京音楽学校系の人達は「唱歌の気品を損うもの」としてこれを排斥し、「気品ある唱歌」の出現を布求した。極言すれば、国定の「文部省唱歌」が生れた背景には、この学閥の縄張り争いがあったのである。

私の幼年時代を回想すると、「言文一致唱歌」からは神話や昔ばなしの荒筋を知った。丁度今の子供がダイジェストされた名作物語をテレビ漫画で覚えるように、大黒さまも桃

太郎も、花咲爺いも一寺法師も、私達は唱歌から学んでいた。ただ根本的な違いは、テレビは見終われば後に何も残らないが、唱歌は繰り返し歌う事によって、知らず知らずのうちに正しい言語を身につける事が出来たのである。

第一次童謡ブームが興ったのは、大正七年に鈴木三重吉が発刊した「赤い鳥」がきっかけとなったというのが定説になっているが、「子供には子供の歌を」と、「気品のある唱歌」にあきたらなかった文学者達が、音楽家と共同して作品を世に問うたというのが真相で、「言文一致唱歌」が現れた時とよく似ている。歴史は繰り返す、という事であろうか。以来、「少女号」「金の船」「童話」「小学女生」「少女倶楽部」「小学男生」「幼年の友」「コドモノクニ」「金の星」「子供の村」等に拠った詩人は、北原白秋、西条八十、鹿島鳴秋、野口雨情、清水かつら、三木露風……、音楽家では弘田竜太郎、成田為三、中山晋平、本居長世、山田耕柞、草川信、佐々木すぐるといつに人々が、大正年代の童謡界をリードしたのであった。中でも本居長世は二人の娘を童謡歌手にして、全国津々浦々を巡って童謡の普及に努めている。

「日本童謡集」(岩波文庫)に採録されている、大正年間に発表された二百一編の中で、曲の付いている物は九十六篇を数えるが、その中で、私の記憶にある物は、北原白秋・弘田竜太郎コンビの作った「雨」(雨がふります。雨がふる。……)以下四十一篇もある。記憶にあるというのは、メロディを覚えていて、一番の歌詞くらいは間違いない歌えるという事である。後に文部省は「雨」他九篇を選んで唱歌に編入している。「金魚の昼寝」(赤いべ

べ着た、可愛い金魚……）鹿鳥鳴秋・弘田竜太郎。「靴が鳴る」（お手々つないで、野道を行けば……）清水かつら・弘田竜太郎。「黄金虫」（黄金虫は、金持ちだ……）野口雨情・中山晋平。「雀の学校」（ちいさいばっば、ちいばっば……）清水かつら・弘田竜太郎。「背くらべ」（柱のきずはをとしの……）海野厚・中山晋平。「風」（誰が風を見たでせう……）西条八十訳・草川信。「どんぐりころころ」（どんぐりころころ、ドンブリコ……）青木存義・梁田貞。「夕焼小焼」（夕焼小焼で、日が暮れて……）中村雨紅・草川信。「揺籃のうた」（揺籃のうたをカナリヤが歌うよ……）北原白秋・草川信——がそれであるが、文部省としては世論におされて渋々認可したというのが実情だったようである。

「文部省唱歌」への反撥から生れた童謡ではあったが、音楽的に優れた歌曲風の物と、一般的な流行歌風の物とに分かれて発展し、昭和に入ってからレコード会社が制作する童謡がこれに加わったが、軍部等の統制によって次第に凋落して行った。

二流に分かれた童謡はどちらが好まれたかという点、これは圧倒的に歌謡曲風の物が好まれた。北原白秋の「砂山」（海は荒海、向ふは佐渡よ……）は、二人の音楽家が曲を付けた珍しい例だが、山田耕筈の物より中山晋平の作品の方が、現代でもよく歌われているのを見れば分かるかと思う。

戦前の童謡は、昭和十九年、日本少国民文化協会が制定した「お山の杉の子」（昔々、その昔……）吉田テフ子、サトウ・ハチロー補作・佐々木すぐる、を以て一応の終熄を見た。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』四月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、再び格調高い小林治郎先生の作品を頂戴することになりました。小林先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度並びに一昨年度の松浦春子先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八 一 八 二 一 八 七

立ち止まるな善導

〈46〉

寺内大音

挿絵・松 濤 遠 文

弥陀の化身



少年憚良は神和原の草庵から一步も離れることが出来なくなった。善導和上の衰弱ぶりが日を迫って目立ちだしたからである。放置することは許されなかった。

善導自身が体調のそんな不協和音を聞知しているのかいないのか。生活のリズムをことりとも変えようとはしないのである。常住坐臥に念仏を休まず、写経を続け、憚良や泥亀の妻を招き寄せては懇切な説法を怠らない。しかし、その声は弱々しく呼吸も乱れ、写経する指先も怪しくふるえた。日々減退してゆく食慾、わずかな粥をすすする折も嚥下するの



が苦しげであった。

「和上、横になってお寝みになられたら如何ですか。この薬草は聖上も御常用になって、ひところの消耗状態から脱せられたと聞きました」

憚良は王城から持ち出してきた高価な薬草の服用をすすめた。皇帝高宗がこれを用いて効能があったと聞きこんだためである。

「いや……聖上は俗事を司るお人です。俗の医薬に頼るのもよろしかろう。わたしどもはみ仏におまかせした命です。俗から離脱しなければ、み仏の使徒とはなり得ませぬ」

「そうはおっしゃってても和上のような貴いお命はいついつまでも生き永らえて、私たち迷妄の者をおみちびき頂かなければなりません」

「憚良よ、わたしが生まれるほんの少し前だが、信行禪師というすぐれた仏者がこの世におわした」

「信行禪師ですか……」

「いつも長安の街の坂下に立っていた。重い荷を載せた車が現れると、禪師はその後押しをした。自身が悪くなって、咳こんで血を吐き散らすようになってもこの苦力を中止しなかった」

「何のためにですか」

「車力と共に汗を流しながら仏法を説き聞かせたのです」

「ああ、その信行禪師とは化度寺の無尽藏院をお造りになった三階教団の……」

善導は笑顔でうなずいた。

少年憚良には兄弟子懐感からこの三階教団に関する断片的な知識があった。懐感は善導門へ投ずる前は熱烈な三階僧でもあったのである。

信行禪師（五四〇―五九四）は隋朝の治世に生きた僧である。三百余人の僧俗をひきいて新しい仏教運動に挺身した。その主張には曲解と飛躍はあったものの、実践行動は捨身の情熱にあふれた集団だった。

末法思想が根底をなしており、この末法期には「普真普正」(あまねき真実、あまねき正義)をつらぬかねば救いはあり得ないと強調した。正法、像法、末法の三時にもとづいて、末法末世で真実と正義を追及すれば、当然社会革命へと飛躍しないわけにはいかない。隋や唐の未成熟な民衆階層のなかで社会革命は実現し難かった。金権による国家転覆以外には社会革命はあり得ない。

信行禪師の在世中は、そんな気配もなかったが、その死後になって三階教団は巨大なものにふくれあがった。信行禪師の遺弟たちが師の教説中から「無尽藏法略」の理念を選択したためである。

この理念によると、衆生が積み重さねてきた罪業は無尽蔵行と無尽蔵施によって払拭されるとする。つまり限らない修行と布施によるというのである。

唐の貞観時、三階教徒たちは長安に化度寺を造立し、その無尽蔵院に財貨を集めるよ

うになった。

「太平廣記」は書いている。

——貞観之後、捨_レ施錢帛金玉_一積集不_レ可_レ勝_レ計、常使_二此僧監_一当分為三分、一分供_二養天下伽藍增修之備_一、一分以施天下餓餓悲田之苦、一分以充_二供養無碍_一。

士礼饑閔咽捨施争次不得、更_レ有述車載_二錢絹_一、捨而棄去不_レ知_二姓名_一。

士女たちは先を争って金銭や帛絹を無尽蔵院へ施捨してその姓名すら名乗ろうとはしなかった。その施貨の使用法は三つに分けられた。伽藍増復、飢餓の救済、そして三番目が「無碍の供養」だ。すべてを無尽蔵院にゆだねてしまったのである。

では寺はどんな「無碍の供養」をなしたのかであるか。

「兩京新記」の以下の文章が一端を覗かせる。

——燕涼蜀趙、咸來取_レ給、每日所出亦不勝_レ數、或有_レ拳便_一、亦不_レ作_二文約_一、但往至_レ期還送而已。

遠く燕(叙州)涼(甘肅)蜀(四川)趙(趙州)からも金銭が納入され、かつ貸付けまでがおこなわれた。契約は簡單で記文も交わさず、期限がくれば債務表は間違ひなく返済した。それを滞ると仏罰があたるからである。

つまり無尽藏院は強力な市民の金融機関へと発展したのである。後世の頼母子講、無尽の先駆である。

市民だけではなく唐政府もこれを利用した形跡がある。則天武后は生母楊氏の邸を無尽藏院とし、金銭集めを試みたこともあった。だが悪徳役人が私腹を肥やしたりして思いどおりにはならなかった。

祖師信行時代の捨身行はどこかへ置き忘れ、ソロバン勘定に熱中した三階教団はやが

て中宗の沿世になると、邪教として禁止されてしまった。

善導はその教義、理念には同調しなかったが、信行禪師の情熱には共感するものがあったようだ。ことに自己中心の修行に偏することなく、積極的に街頭へ進出し、庶民大衆と触れ合う教化実践には教えられるところが多かった。善導自身が街角に立ち、写経した阿彌陀經を市民男女に配布したり、六時礼讃の梵唄指導に精を出したのも、三階教団の影響をうかがわせるものがある。つまりこの新興教団は教義解釈に独断はあったにせよ、仏教活生の先端を切ったということが出来る。

草庵で善導が信行禪師の「捨身行」を語っているとき、神和原に二人の僧が姿をあらわした。

「懷感ではないか」

珍しく善導は声を高くして呼び入れた。

「お師僧さま、そちらでしたか」

「いま、おぬしのこと……信行禪師の話をし

ていたところです」

「私も無性にお師僧さまのお顔を拝したくなつて。それにしても……」

と懷感はあるの言葉のみこんだ。しばらく会わぬ間に余りのやつれようだ。しかし、それを口にするわけにはいかなかった。

「すっかり病み衰えたでしょう」

善導は微笑を結びながら淡々と語る。まるで他人事のようである。

懷感のかたわらに控える若い僧は、そんな善導をうつとりとした表情で眺めていた。人間を見ようとする眼ではなかった。

二

「おぬしは今も千福寺に止住しているのですか」

善導は近ごろ常時服用する蜜を混ぜた熱湯をすすりながら訊いた。

「はい、浄土に関するさまざまな疑問や非難に答える文章をまとめているところです」

「それは、だいぶ以前から筆を染めていましたね」

「足かけ二年になります。やればやるほど問題が生じてまいります」

善導から学んだ浄土思想の真髓だった。これは後に「釈浄土群疑論」と表題され全七巻にまとめられた述作である。ただし完成をまだずに懷感の世を去り、懷憚あるいは浄業が終章の筆をおろしたと伝えられる。

善導はいぶかしげな視線を愛弟子へあてた。

「懷感よ、わたしがこの神和原にこもっていることを、どうして知ったのです。誰から訊いたのか。たしかおぬしはその述作と取り組んで……」

「そのとおりです。一日も早くこれを完成して、お師僧さまにお見せしたいと念じていました。それまでは千福寺から一步も出まいと

自分に誓っていたのです」

三階教の「捨身」思想を信じこみ、自絶を決意し断行する寸前善導に説得されてこの世へ引き返してきた懷感である。信行禪師ゆずりの熱鉄の意志を持ち合わせていた。それが仕事半ばで出かけてきたのである。

「誰から訊いたのです」

善導はもう一度たずねた。

「この者です」

と懷感のかたわらの若い浄業を顎で示した。

「この人は？」

「以前一度お目にかかったはずですが、三論僧だった者で浄業と申します」

「そうですか」

善導の記憶にはなかったようである。

「浄業よ、今朝のことを自分から和上に申し上げるとよい」

「はい、千福寺で朝のお勤めをしております。阿弥陀経を誦していると、金色の光りが

鮮やかに差しこんできたのです。それが御本尊の木像とは全く反対の方角から差しってくるではありませんか。懷感さまにその旨を申し上げると、光源をつきとめようとおっしゃる……」

二人は境内へ降り立った。金色の光りは杉木立ちの間から差し出ている。木立ちを通り抜けたが光源は長安の街の南方へまで伸びていた。

二人は歩き続けて、とうとうこの神和原まできてしまったというのである。

「それで、金色の光りは？」

善導は耳を集めて聞き入る。

「和上さま、あなたです」

「わたしだと」

「金色の光りは和上のお身体から発していたのです」

「……」

懷感が会話を引き取った。

「和上はお山の悟真寺にいらっしゃるものと

思いこんでおりました。此処にこんな草庵が出来ているとは想像だにしませんでした。ただ、この浄業が金色の光りが見えると申します。未だ見える、未だ見える、と言って此処まできてしまったのです」

「それで、懷感には見えるのですか。その金色の光りが」

「じつは私には……」

「それでよろしいのですよ」

「よろしいとは？ 私の信心がこの浄業に比べて、なお劣っているということでしょうか。あれほどお師僧さまをお慕い申上げていますのに」

懷感はおのれの不明に深く恥入る様子だった。

「そうではない、懷感よ。わたしの身体なぞから、なんで尊い阿弥陀仏の光りを発することが出来ましょうぞ」

「いやいや和上さまは弥陀の化身でいらっしゃる」

「違う、この善導は煩惱具足の愚痴にまみれた一介の男にすぎない。ただわたしが永年にわたってとなえてきたお念仏、口先だけではない、全身となえてきたお念仏が金色の光りになっただけです」

「その光りが、なぜ私には見えないのでしょうか」

「懷感よ、おぬしはいま、念仏の理念を述作にまとめあげようと日夜腐心している。その分だけ念仏から遠ざかっていることになる」

「理に傾くと……」

「ひと本来のすがすがしい眼が濁ってくることになる。その点、この浄業はいま純粹な念仏をとなえている。眼にひとかけらの濁りもない」

「わかりました。では私もいまやっている述作を放棄して……」

「そうではありません。懷感よ。念仏をこれから励もうとする者のための手引き。これもまた、だいじな述作です。そのためにおのれ

信心が停滞してもやむを得ません。自行と教化とは、つねに平行し、あるいは交互におこなわなければなりません。自行だけでは、他を救う大乘の精神にもとることになります。教化へ偏執するあまり自行を怠れば、口舌の徒、学理の沙石と化してしまします。わたしも観無量寿経を研鑽するさなか、幾たびこの迷いに悩んだことでしょう」

「よく判りました。現在の私にとってお師僧さまは、この世に二人といない智慧深いお方。そして、この浄業には阿弥陀仏そのものということなのです」

「そこに法蔵比丘だった菩薩と、仏になられた阿弥陀如来の両面をお持ちなのではないでしょうか」

万人の救済を誓った法蔵比丘は、おのれが「救われる」ことを未来永劫にわたって拒否されたではないか。この世に、救われない者が一人でも存在する間は……という誓願である。また、この誓願があるからこそ万人はそ

の御名をとなえて安んじて浄土へ往生することを信じられるのではないか。

少年憚良はこうしたやり取りに耳聴を集中しながら浄土願生者がたどるべき道が、鮮明に透視できた思いであった。このまばゆい光明の世界で、人間の苦悩は光塵となって消え去ってゆくであろう。

語り疲れたのか。善導の細い上半身が折れるように右へ傾いた。

「あっ、お師僧さま」

憚良が飛びつくようにして抱きかかえた。

「この手を放しなさい」

あえぐ息のもとで善導はつぶやいた。

「でも……」

「手を貸す前に念仏をとなえなさい」

「念仏を？」

「懐感よ、おぬしもとなえて下さい」

「お師僧さま、お浄土が見えてきたのですか」

懐感は思わず口走ってしまった。

☆☆

願
生
者



「何を言うのか、懷感ともあろうものが……」

善導は意外に力強い語氣でたしなめた。

「は、はい」

うろたえねばならなかった。

「病んで、死を眼前に見えてくるようなお浄土ではない。日常に見えるのでなければいけません。いや、真の願生者はお浄土に立って生きているのです。念仏をとえなさい。善導はその念仏のなかに生きております」

声だけではなかった。憚良がかかえた腕をほどき念仏をとえだすと、善導の背筋は一本芯棒が貫通した如く前以上に端正な姿勢を取り戻していた。しっかりとした声音でみんなの念仏に唱和するのだった。

「やはり、ほんものの阿弥陀如来さまです」

ひとりつぶやいて何度もうなずいている浄業の横顔を、憚良は貴いものでも拝がむように凝視した。



懷感は、浄業を神和原の草原にのこして長安の千福寺へ帰っていった。自行と教化——念仏に専念することをこの法弟にゆだね、自分は教化のだいじな一翼ともなるはずの「釈浄土群疑論」に没頭する所存であった。それが善導の教旨でもあった。

当然のことだが、少年憚良は浄業と暮す明け暮れとなった。

「これで、和上さまはお念仏のなかで永遠に生き続けられるのでしょうか」

憚良の質問に浄業は、何を愚かなことを、と言いたげな表情で応じた。

「弥陀の化身でいらっしやるあのお方に死なぞあり得ませんよ」

「そうでしょうね。昨日もあれほど弱られたのに念仏の声とともに立ち直られました」

「念仏に死はありません。釈尊とて涅槃へ入らないと明言されております」

「釈尊は八十歳で、クシナガラ（沙羅双樹）の樹林で入滅されたわけではありませんか」

「それは色身であって、法身は永遠に生き永らえていらっしゃいます」

「色身と法身——」

「私どもの五体と、念仏のなかで生きる身を指して言った言葉です。大涅槃經を読んだことがありますか」

「いや……」

憚良は顔を赤らめてうなだれた。宮廷にかえる少年の身ではひろく經典をひもといっている余裕はなかった。

「阿闍世太子は知っていますね」

「浄土の經典は味読しております。和上の観經四帖疏もくり返し読みました」

「それでは父王を殺し、母の韋提希夫人を責めぬいた悪太子のことはよくご存知のはずだ」

「はい、存じています」

浄業は懇切に「大涅槃經」の解説をしてくれた。悪太子阿闍世が救われる顛末が、その「梵行品」でくわしく語られているのであった。

クシナガラ（沙羅双樹）の樹林で、まさに涅槃へ入ろうとする釈尊は、突然かたわらにいる弟子たちに「中止」を宣言する。

——なぜですか。

仏弟子の迦葉がたずねる。

——いま阿闍世は七転八倒の苦しみに悶えている。あれを救わねば、わたしは涅槃へ入ることが出来ない。

このあたりはドキュメントのタッチで描かれる。沙羅双樹林から遠く離れたマガダ国の城内で、阿闍世太子は全身から発した「吹き」ものの「」のために苦しみながら床を転ろげまわっている。

名医の耆婆（ぎば）がやってきて、この宿世の病根は釈尊以外に治すことは出来ないと言

いきる。

だが阿闍世は釈尊を恐れ、出かけてゆく
としない。そこへ天の声となってこの息子に
殺されたビンバサラ王が強く戒告する。釈尊
に会って法を聞きなさい、と。

阿闍世は父王の声を聞いただけで悶絶して
しまう。

そのころ沙羅双樹林では弟子の迦葉尊者が
疑問を投げかける。

——なぜ阿闍世ひとりのために、そんなこ
とをなされるのですか。あんな悪王を救うた
めに尊い涅槃をお避けになるなんて。

しかし、釈尊は同じ言葉をくり返すだけで
あった。

——阿闍世ひとりだけを救わねばならな
い。

——なぜですか。

——太子はあらゆる苦を背おっているから
だ。阿闍世だけを救わねばならない。

阿闍世は沙羅双樹林へ飛んでいったのであ

る。釈尊は諄々と太子が犯した罪の本質を説
き明かしてゆく。

この世における現象のすべては「空」であ
る。とすれば太子が犯した父殺しの罪も「空
相」ということになる。罪に悶え苦しむこと
なく、ひたすらに仏の慈悲を信じて自己の内
に隠されている正しい心に目ざめよ、と教え
諭した。

阿闍世太子は、ここにおいてようやく苦の
繋縛から解放された。釈尊はそんな太子を見
やると安らかな表情になり、涅槃へ入られた
のである。

「下品下生の悪人でも万人が救われるという
お浄土の思想は、ここに根源をおくわけです
が、すべてが「空」とする大乘観には生も死
もないはず。善導和上がおっしゃるお念
仏する声のなかにこそ浄土がある、とはこの
ことなのです。だから私どもが、和上ご自身
がお念仏を途切らさない限り、和上に死は訪
れないでしょう」

「しかし、色身の死は……」

「もちろん、五体そのものはいつか消滅するでしょうが、念仏する声は私どもに相続され、さらに私どもが説いて信者とした人に受け継がれ、永遠にこの地上に生き続けるのです。それが法身ですよ」

憚良は心底から湧きあがる法悦で、全身を火照らせながら未だ二十五、六歳かと思われる浄業の口もとを見つめた。

「あなたは和上に一度しかお目にかかっていないということですが、どうやってそんなに深く和上の教えを領解なさったのですか。私などは何年お仕えしても悩みがふえるばかりです」

「悩みがふえているわけではありませんまい。憚良さんは未だ若い。お念仏の功德を知るための機会を沢山つくろうとしているだけです」

「お念仏の功德を知るための機会、ですか」
若い二人の法談は次から次へとひろがって

ゆくようである。すぐ向うの草庵の奥では善導が聞くともなく、せつせつ写経にいそんでいた。

お互いの言葉が出つくしたころ、善導は筆をおいた。

「浄業よ、そこまでしゃべると、わたしの身体が金色に見えないでしよう?」

「お身体が……ええ」

「憚良よ、いま浄業が語った内容はすべて忘れ去りなさい。そして無心に念仏をとなえることです」

「善導和上、昨日はあんなにまばゆく見えていた金色の光りが、いまは消えてしまいいました」

「それは理が勝ってきたからですよ。あなたの素朴な感性に薄帛がかぶられてしまったのです」

「たしかに……」

「だからわたしは弥陀の化身ではない。一介の年老いた念仏者にすぎません」

「ああ、もったない、そんなことをおっしゃって。和上が弥陀の化身である点には疑いの余地もございません。昨日とかわって見えなくなったのは、私自身の眼が脇見をしていたからですよ」

どこまでも敬虔さを崩そうとしない浄業であつた。

空厥人泥亀の妻が粥の鍋をさげて現れた。

幼な子がまつわりついている。

その夕餉を善導は、いかにもおいしそうに食べた。

「今宵はすっかり御体調が回復なされたようでございますね」

尼は嬉しそうな眼をほころばした。

「照る日も曇る日もありますよ。しかし……」

椀の底まで食べつくした善導は、空らになつた底をじっと覗きこんでいる。

「しかし、何でございますか」

惺良は続く言葉をうながした。

「もっと欲しいほどです」

「もう一椀、召し上がったら如何でしょうか」

「過食を求めるときは、次に絶食が待っているものです」

「絶食？」

「燈火も消える直前には、いちだんと強く燃えあがるものです」

「和上、何をおっしゃるのですか」

不吉な予感で少年は身をふるわせた。

善導は、お替りすることもなく白湯で椀の内をさらい、おいしそうにその白湯をのみはすと、静かな声で念仏を口唱しはじめた。静かではあつたが、誰もがさえぎることの出来ない強い響きがこもっている。みんなが唱和しないではおれなかった。

(つづく)

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 四月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十三年 三月二十五日 印刷

昭和六十三年 四月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

好評

浄土宗勤行の解説

B 6判三六六頁
価三、六〇〇円

日常勤行式、歎仏偈、三尊礼、真身観文、阿弥陀経、一紙小消息、歎仏頌、讚重偈、光明歎徳文、後夜と晨朝礼讃偈、六時礼讃無常偈、発願文、五懺悔、広懺悔、帰三宝偈、三帰礼、祝聖文、広開偈、還相回向偈、自信偈、降魔偈、歎経偈、本誓偈、外に三偈文

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B 6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B 6判二九六頁
価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

B 6判八四七頁
価六、八〇〇円

和訳 浄土

三部経

B 6判四七四頁
価二、五〇〇円

和訳 法然上人

選訳集

B 6判三八七頁
価二、五〇〇円

和訳 善導大師

観経四帖疏

B 6判五八四頁
価三、五〇〇円

和訳 善導大師

六時礼讃

B 6判二六五頁
価二、四〇〇円

檀信徒用 浄土宗のおつとめ

一部価四七〇円

○葉書でお申込下さい。代金(送料実費)は後払(振替用紙同封)

編と訳 村瀬 秀雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

發行所 常念寺

電話 0465-43-1352

振替 横浜 3-8296番